

ヨーロッパ博物館視察記 VI

Survey Reports of the Museums in Europe VI

間 多 善 行
Yoshiyuki MADA

ロンドン 1

8月12日18時にリスボンを発って、20時にマドリードへ着いて一夜を過し、翌13日11時5分マドリード発、12時10分ロンドンのヒースロー空港に到着した。これでツアーの一行に合流したわけである。ヒースロー空港はさすが大英帝国の玄関口だけあって、今までの各国空港に比べて、どっしりとしてしかも瀟洒^{しょうしや}、紳士の国の体裁を備えているのには感心した。そして、それからすぐ、中心街のリーゼント通りに出て昼食をしたが、ちょうど羽田から銀座へ出るくらいの感じであった。後で地図を見て調べて見たが大体同じで20余キロである。午後市内の主なところをざっと廻ったが、私の子供の頃からの霧と煤煙の都という暗いイメージとは打って変って、明るいつ綺麗な街並であった。これは拍子抜けするほど意外であった。さて、今夜から4晩やかいになるホテルはリーゼント・パークのすぐそばにあって寂かな住宅街の真中で、大きくはないが小さざっぱりとした建物であった。ただ、ここもグリルは常設でなく、朝食のときだけ開くという簡易型であった。従って昼食と夕食は外食して来なければならないのが不便である。

さて、到着翌日は三越で以前から仕事上よく知っている人がロンドン支店長をしているというので、訪ねることにした。店へ行行って土産物を買って店員に名刺を渡して支店長にお目にかかりたいというと、暫くしてどうぞと支店長室へ通された。お互いに久闊を叙して、積る話が長くなったが、彼は今ロンドン支店長とヨーロッパ総支配人とを兼ねていて、とても忙しいので、お付き合いはできないが、接待係をいつでも使って頂きたいと紹介された。さし当り昼が来たので、近くにあるクラブで昼食をと、その接待係とこちら同行の2人と3人で出かけることにした。歩いて3、4分のところにあるハンターズ・ロッジという由緒ありげなクラブに案内された。ロビーで待つあいだにワイン専門のウェーターが注文を聞きに来る。こちらはメニューを渡されても分かりはしない。接待係に適当に注文してくれるように頼む外はない。そうするとオードブルは何にしましょうかという。それも

適当に頼む、というところでは、今メロンと生ハムが一般にオードブルに使われていますがそれでよろしいか」と聞く。勿論否やのあろう筈がない。それでワインをちびりちびり飲んでいうちに、用意が出来ましたと案内が来てディニング・ルームに通された。室はウォルナットの板張り、家具類もそれに合せた重厚な仕上げである。料理は何か肉料理であったが、別に美味しいとは思わなかった。それが終わってから接待係と別れて、いよいよ待望のブリティッシュ・ミュージアムに向う。

12. 大英博物館(ブリティッシュ・ミュージアム)

ブリティッシュ・ミュージアムは、ある意味で世界の博物館の1つの基準を示していると思うので、博物館学的見地から種々の分析を加えながら見聞を進めて行きたいと考えている。

まず、成り立ちであるが、さすがは英国、日本などでは考えられないような経過をたどっている。殊に際だっているのが設立に要する資金の調達である。その発端は、当時4万余冊の貴重な図書、32,000箇のコイン、数万点に上る鉱物及び動植物の標本等を擁する有名なコレクションの持主で王室侍医であったスローンが死に際して、このコレクションを「一括して国内で保管すること」を条件に、2人の娘に残すための2万ポンドで譲渡することを遺言して亡くなったことから始まる。直ちに友人達を中心に委員会が組織され、王室で引取られることを考えたが、王室の財政が許さないので、議会で処理して貰うよう運動を始めた。時の大蔵総裁ヘンリー・ペラムは「そんなガラクタに公金を費やすことはできない」と一蹴してしまったが、幸いに下院議長アーサー・オンズロウが文化に関心を持っており、当時懸案になっていた他の2つのコレクションと一括して博物館を創ること、それに要する費用は国庫には財源がないので、富くじを発行してその剰余金をもって当てるという2つの条件を盛り込んだ「大英博物館法」を提案してくれた。この法案が1753年6月7日下院を通過して、世界の博物館界に特徴的なブリティッシュ・ミュージアムが出現することになったの

である。私が資金の調達に際立った方法といったのは富くじを利用したという点である。これがその当時、前東京都知事のような人がいて「文化施設を造るのに不浄の金は使えない」といって取り止めにしていたら、あの世界的な博物館はできていなかったのである。英国人のプラクティカルな性格がこれを実現させたわけである。そのほか、ブリティッシュ・ミュージアムには書きたいことが沢山あるが、それを今話していたら視察記にならないので、必要なことはその都度述べることにして、とにかく入館することにしよう。

ギリシアのパルテノンを模した主屋とギャラリーで続いた両翼を持った建物は敷地一杯になっていて、前庭が狭い関係か、門をくぐると上から覆いかぶさるような威圧感をもって迫ってくる。しかし入口は実に庶民的で、入場料をとらないから、券売場の窓口のようなものではなく、何かたよりない程の無抵抗さで中へ入れる。この入場無料がまた大英博物館の1つの特徴で、創設以来入場無料で通し、財政逼迫で守衛の給料も払えなくなったとき、一時期入場料を徴収したことがあるだけである。しかし、ある時期やはり財政不如意で入場料が問題になったとき、ヴィクトリア女王がそれを耳にして、「国民が自分の物を見るのにお金をとるわけに行かないでしょう」といわれた鶴の一声で沙汰止みになったという逸話も伝えられている。それからあらぬカンドンでは何処へ行っても博物館、美術館は無料である。

さて、入口からホールへ、それから売店の中を歩いて、古代文明の遺品が眼も眩むばかりに並べられた西アジア、メソポタミア文明の発掘品、エジプトの発掘品の室が続く。殊にエジプト資料は、博物館資料としては類のない歴史的戦争の戦利品として英国が手に入れた物である。1798年-1801年に亘ったナポレオンのエジプト遠征軍の駐留に際して、彼は200人にのぼる学者、芸術家からなる「学芸委員会」を引き連れて行った。遠征軍はカイロを占領した直後、英国海軍を率いたネルソンにアレクサンドリアに停泊中の艦隊を急襲され、フランス海軍は全滅してしまう。エジプトにとり残されたナポレオンは陸路シリアを征服して地中海沿岸を迂回して帰る計略を建てたが、この作戦も思惑どおりには行かず、翌年の8月にはナポレオンは少数の幕僚と兵500を引連れ、4隻の船を盗んでフランスへ逃げ帰ってしまった。学術調査隊は、そんなことにはお構いなく仕事を進めていたが、1801年英仏との間に休戦条約が成立して、古美術品、古文書類は英国

が押収、自然史関係の資料は研究者の個人財産ということになり、厩大なエジプト発掘品がすべて大英博物館に収まることになったのである。その内のほんの一部が、私が今入った第一室に展示されているわけである。この量質共に超一流の資料が1802年大英博物館に到着したときには、とても入るスペースがなく、応急の仮小屋を建て収容する有様であった。従ってこのエジプト資料だけでも、末だに隅々まで調査が行き届いていないと思われる。というのはこれ以外にもそれに劣らない大コレクションが何回も入庫しているからである。それを一々説明していたら、大冊の本ができるほどの量になるので、ここではそれらの追加コレクションの名前を列記するに止めて置こう。タウンリー・コレクション=チャールス・タウンリーの収集した、ローマ周辺で発掘された大理石・青銅・テラコッタ等の彫刻が主で、当時エジプト発掘品に匹敵するといわれた。ハミルトン・コレクション=外交官で各国を廻っている間に、生来の鑑識眼に物をいわせて優秀な古美術品を収集したもの。このハミルトンは、あのナポレオンのエジプト資料を接収するときに、外務省の役人としてその事務に当たっていたが、そのときフランスの考古学者らが、考古資料として重要なロゼッタ・ストーン(あとで説明する)だけは絶対に手放したくないと秘かにフランス行きの貨物船の底にかくした。これを察知したハミルトンは敢然として出航間際のフランス船を阻止して、そのロゼッタ・ストーンの奪回に成功した功労者である。そのことについては後で改めて説明するとして、次はエルギン・コレクション=これはエルギン伯トマス・ブルースがトルコ公使をしているとき、その頃トルコの支配下にあったギリシアのアテネを訪れて、パルテノンの荒廃ぶりに驚き、このまま棄て置いたら風化して、日ならずして跡を止めなくなってしまうと、トルコ政府と交渉して十数年の歳月をかけて漸く英国に持ち帰ったもので、欄間飾りの厩大な浮彫を始め、神殿を飾っていた無数の大理石の彫刻等エジプト資料に劣らない量と質を持っているものである。これら美術品コレクションの他に写本、原稿、図書等のコレクションも著名なものだけで、ハーグレイブ・コレクション、バーニー・コレクション、シエルバーン・コレクション、ジョージ3世・コレクション等がある。しかも今挙げた美術品コレクションは、どれ1つとってもそれだけで大博物館ができる量と質を持っているのである。いかに大英博物館が桁はずれの資料を蔵しているか想像を絶するものがある。

さて、そのエジプト美術品の展示してある室の中央に、余り目立たないが1メートル巾、縦1メートル半位の木枠に入った、文字を一面に彫込んだ石片が展示してある。これぞ先程ちょっと書いた、ハミルトンがフランス貨物船の船底から奪還して来たというロゼッタ・ストーンである。この何の変哲もない碑文の欠らのようなものが何故そんな命がけで奪い合う程の値うちがあるのであろうか、それは今から述べるこの石の由来を知らなければ路傍の石と何ら変らないのであるが、学会の皆さんは専門の如何にかかわらず英国を訪れるならばブリティッシュ・ミュージアムに1度は足を踏み入れられると思うので、少し長くなるが説明しておくことにする。先に書いたようにナポレオンはアレクサンドリアで英国艦隊のため味方の艦船を全滅されたので、敵の上陸攻撃を防ぐため海岸の要所々々に急きよ要塞を築き始めた。その内の右の方の1つがロゼッタの町で、前からある要塞を修築することになって工事を始めた。ロゼッタはナイル河のデルタ地帯の西の端に流れ込んでいる水路の河口にある町で現在はラシドと呼ばれている小さい田舎町であるが戦略的には要衝である。その工事を始めて間もなく不思議な石碑の破片を発掘した。それは黒い玄武岩の表面を磨いて、細かい字をびっしりと一面に彫り込んだものであった。よく見ると3段に違う文字で彫ってある。早速学術委員が調査して見ると、上の段はエジプトでよく見かける絵文字で、鷹の絵や蛇、鳥の羽根などの絵を交えたヒエログリフ(神聖文字)と呼ばれるもので、中段にはデモティック(民衆文字)が、下段にはギリシャ文字が刻まれていて、同一の文章を3種の文字で表わしてあるらしいことは解ったが、それ以上は派遣隊ではどうにもならなかった。しかし、これがヒエログリフ解読の鍵になるであろうことは誰の眼にも明らかであったので大切にするとともに、その写しを紙にとって本国へ送ることにした。原石は持出し直前に先程書いたように英国外交官ハミルトンに、戦利品としてロンドンに持帰られ、現在見るようにブリティッシュ・ミュージアムに展示されることになったのであるが、問題は写しの方である。フランスでは、パリに送られて来た写しを学者が集って、まずギリシア語の部分を翻訳した結果、紀元前196年に建立されたプトレマイオス5世・エピファネスの頌徳碑であることが解った。しかしヒエログリフの方は語学自慢の学者が何人か挑戦したが皆失敗に終わってしまった。そこへ出て来たのが天才シャンポリオンである。彼は幼時からギ

リシャ語、ラテン語を学び、さらにヘブライ語、アラビア語を収めて古代史を研究していた。ヒエログリフの解読にあたって、「クレオパトラ」と「プトレマイオス」という王の名前を楕円型の枠で囲んであったことを手掛りとして、数年を経てヒエログリフのアルファベットから文法までを解明してしまい、その結果を1822年フランス学士院で発表するに至った。ヨーロッパの学界は驚嘆するとともに、それ以来古代エジプト学が盛んになり、ロゼッタ石は一躍有名になったのである。こうして世界的なこの石は1924年、ツタン・カーメンの華麗な発掘品が入って展示の位置を換えて以来ここにずっと坐り続けている。第二次大戦中にブリティッシュ・ミュージアムにも爆弾が落ちたが、図書が一部焼失しただけで、美術部は被害を受けなかったらしい。

さて、入ってから第一室、第二室を見るのにこれだけの紙数がかかってしまった。まだ三十数室あるのだから、あとは残念ながら省略せざるを得ない。とにかく創立以来235年の歳月と莫大な国費をかけて今日に至っただけに、その規模は日本の博物館とは桁が違う。今、手許にある数字でブリティッシュ・ミュージアムと東京国立博物館との概略の比較をして見ると、次のようである。

大英博物館 東京国立博物館

収 蔵 品	約 4,000,000点	約100,000点
展 示 品	約 400,000点	約 3,000点
職 員 数	約 950人	約 150人
年間予算	約10,000,000ポンド	—

これだけを見ても日本の博物館界がいかに遅れているかがおわかりになるであろう。今、日本は産業経済においては既にヨーロッパ各国の水準を抜いたと自負しているようであるが、文化の面においては未だしの感を深めざるを得ない。そういう感想と、もう1つそれを裏書するように、ブリティッシュ・ミュージアムの中を歩いていると豊富さの中での感じがするが、そのとき東博の本館の光景を思い浮べるといかに貧寒の感じを抱かざるを得ない。大分長くなったので、ここまでにしてこの物量の館を出ることにする。

外に出ると、まだ陽は高いが時間はもう5時近くなっている。今晩は三越のヨーロッパ総支配人のK氏から招待されているので、一旦ホテルへ帰って一休みしてから出かけることにして、タクシーでホテルまで帰る。ロンドンのタクシーは、よく本で読んで古い型式のオースチンだと聞かされていたが、まさかこれほどとは思わなか

った。どれを見ても例外なく20年位にはなろうという箱型セダンで、中へ入るにも余り頭を下げなくていい。日本の車だとタクシーでも敷物を敷いてあるが、ここのは板張りのままである。まるでトラックにでも乗せて貰ったような気持である。さてホテルへ着いて2階の室へ落付いて窓から見ると、隣は広い芝生があって人が2、3人動いている。ちょっと様子が違うので地図を開いて見ると、Lord's Cricket Groundとあって、後で聞いたところによると由緒あるクリケット・クラブの本部だとのことであった。前に書いたハンターズ・ロッジといい、紳士のクラブが到るところに転がっているところが他の国と違うところである。実は今から出かけるK氏の招待先も、クラブの1つで相当高級の方だと後でわかったが、惜しいことに名称を聞きもらしてしまった。とにかくこちらはお登りさんであるから先方の指図り動いていればいい。時間が来たので例のトラックタクシーに乗って三越の店へ行く。ここへ来ると日本橋の本店にいるような気になる。店の雰囲気というのは不思議なもので1つ1つを見ると大部違うのであるが、全体的な感じは三越色で統一されている。私は日本では三越の地方支店は催物の関係で殆んど行っているが、まさか外国へ来てまでそれが通用しているとは思わなかった。小さい応接室で待たされている間にそんなことを考えているうちに時間が経ったのか、昼間の接待係が来て案内される。最初に釘をさされたとおりのK氏は忙しくて付合えないので私がお伴をさせていただきますとのことであった。案内されたところは住宅街の中の普通の中流住宅と変らない構えのクラブであった。違うところは英国独特の紳士風のウェーターがいて、細かいところまで眼を配ってサービスしてくれる。日本のホテルのウェーターのように颯爽とした眼立つ動作は決してしない。玄関を入るとホールから続いてロビーがあり、室は大きくないが立派なバーがあり、ウェーターがメニューを持って食前酒の注文をとりに来た。こちらは勝手がわからないから接待係氏に任せて置くと、昼と同じくウィスキーに生ハムとメロンを付けて持ってきた。それをちびりちびり飲みながら歓談しているとまづワイン専門のウェーターが注文を聞きに来る。それが終ると料理のオーダーをとりに来る。勿論メニューを見てもわかりはしないから任かせるといったが、メイン・ディッシュにはどういうものがあるかと聞くので、この自慢の料理は何かという接待係氏は2、3の料理を説明し始めた。その中にドーバーソールといって、ドーバー海峡でとれる舌ひらめのムニエルというのがあったから、一も二もなくそれにしてもらった。どうしてそれ

に飛び付いたかということ、元来私は日本人の中でも小食の方で、こちらへ来てディナーのボリュームに音を挙げていたから、舌ひらめのムニエルということであればと、あの日本のレストランで食べる15センチ位の身の薄い舌ひらめを思い浮かべながら、これならそう苦勞なしに食べられるだろうとそれに決めたのである。料理の注文が終ると、こんどはワイン専門のウェーターがワインの注文をとりに来る。これは接待係氏に任せておいた。いよいよ料理の準備ができたというのでディニングルームへ案内される。オードブルは紅鮭の燻製が主で、その廻りにカナッペが2、3種付いている。オードブルをつまみながらワインを舐めるように飲んでいるうちに、もう腹に手応えができて来た。そこへスープが来る。スープはポタージュであったがその量の多いこと、大体日本で出る量の3倍位はある。そんなに無理して飲むことはなかったのであるが、こちらが主賓であるのに残すとシェフに悪いと思って飲み干してしまった。もうこれで満腹に近い感じがして来た。その横に出されたコンビネーション・サラダに手も付けない間にもうファーストが出て来た。ビーフシチューである。シチューの場合、日本ではビーフを2センチ位のさいの目に切ってあるが、ここのはそれが5センチ角位ある。そのサイコロを1片食べただけでついに腹がいっぱいになって、胃が突っ張り、前屈みになるのも苦しい程になって来た。これは困ったことになったと思っているうちにメインディッシュができましたと言って、シチューの皿を引き、その後へ一際大きな平皿が置かれた。そして次のウェーターが湯気の立っている大きな皿を持って来たと思ったら、それをひょっと私の左脇へ指し出した。それを一目見て私は仰天してしまった。何とドーバーソールというのは、形は日本の舌平目と同じであるが、長さ50センチはあろうという、まるで鮭を丸煮にしたようなしろものである。それを私一人のために調理したので注文主に見せに来たわけである。仕方がないのでなずくと傍にいたウェーターが、真中の一番厚い部分を5センチ位の巾にぶつ切りにして私の皿に盛り、ソースや付け合せを付けて、後の部分を引いて行った。これがロンドンの高級クラブの方式であるらしい。こちらはそんな要領を知らないから、出されるものを正直に食べて行って、遂にメインディッシュには一口も食べられないという田舎者振りを発揮したわけである。

今日は昼間はブリティッシュ・ミュージアムで物量に驚かされ、夜はクラブでドーバーソールに驚かされるとい、よくよくの特異日だったらしい。